

在日中国人留学生と食の文化変容

—日本での食生活に対する満足度—

Food Acculturation in Chinese Students in Japan: Satisfaction with a Japanese Diet

○田中共子（岡山大学）Tomoko Tanaka(Okayama University)

高濱 愛（一橋大学）Ai Takahama(Hitotsubashi University)

はじめに

食行動・食生活は、留学生生活を健康に過ごすうえで大変重要な要素である。しかし、安友・西尾（2008）等、留学中の食生活への栄養学的な調査が散見される程度で、文化受容の観点からの解明は進んでおらず、母文化と滞在先文化の狭間における食育がどうあるべきかも未詳である。そこで我々は、日本で学ぶ留学生として最も人数の多い中国人留学生を対象として、日本留学中の食生活に関する探索的研究を試み、食の変容と健康行動としての問題点を探った。先には面接に基づき、中国人留学生 21 名の基本的な食生活構造を分析した（田中・高濱、2012）。そこで明らかになったことは、来日後の彼らの食生活は健康的な望ましい面ばかりではなく、日本人学生と似た不健康な面も併せ持っていたこと、彼らにとって身近なのは家庭料理に代表される伝統的な食文化ではなく、外食産業やコンビニやスーパーの手軽な食文化の方だということであった。今回はこのうち 17 名を対象に、追加調査を行って、食生活の満足度とその理由を尋ねた結果を報告し、心理的な豊かさの観点を含めた食育の構成について検討する。

方法

調査対象者 日本留学中の調査（田中・高濱、2012）に協力した中国人留学生 21 名の中から、追加調査にも参加した 17 名（表 1）。地方都市にある大学（U1、U2、U3）に所属しており、L、P、R、U は理系、残りは文系の学生である。

手続き 留学生の都合にあわせて、メール、電話または対面での対話を行い、以下について尋ねた。(1)未・既婚の別、(2)中国在住時の主な食事の形態、(3)現在の食生活の評価(10 件法)とその理由、(4)中国在住時の食生活の評価(10 件法)とその理由。

表 1 調査対象者の属性

インフォーマント記号	性別	年齢	日本滞在期間 (月数)	居住形態	出身地 (記号)
A	女	21	14	下宿 (B とルームシェア)	L1 省
B	女	21	20	下宿 (A とルームシェア)	L1 省
C	女	20	9	寮	L1 省
D	男	27	8	寮	X1 区
H	女	23	48	下宿	S1 省
I	男	23	3	寮	N1 区
K	女	24	65	ホームステイ	Z1 省
L	男	25	31	寮→下宿	J1 省
M	女	24	1	下宿	J2 省
N	男	31	13	寮	S1 省
O	女	22	25	寮→下宿	L1 省
P	男	21	32	寮→下宿	S2 省
Q	男	25	3	寮	S1 省
R	男	24	69	寮→下宿	J1 省
S	男	24	26	下宿	J3 省
T	男	22	32	下宿 (ルームシェア)	L1 省
U	男	25	32	下宿 (妻と二人暮らし)	J2 省
平均		23.71	21.86		
SD		2.33	20.02		

注 1) A、B、C、O は U2、L は U3、その他は U1 に所属。注 2) E、F、G、J は今回の調査に不参加。

結果

留学生の回答の概略をまとめて、表 2 に示した。食事のパターンとしては、中国在住時には、主に学校の食堂で食事をとっていた学生が、17 人中 13 人と最も多かった。学食以外では、家で親が作ってくれる食事を食べていた者が 8 人を占め、うち 4 名がたまに外食をしていたと答えた。来日前と後における食生活の満足度を尋ねると、日本における現在の食生活は平均 6.85 点 ($SD=1.58$)、中国在住時は平均 7.82 点 ($SD=.86$) とともに比較的高かった。しかし対応のある t 検定を行ったところ、現在のほうが、中国在住時よりも有意に食生活の満足度が低いことが示された ($t(16)=-2.45, p<.05$)。

日本の食生活に対する評点については、8 名が肯定的理由、12 名が否定的理由を記した。複数の回答が得られたものを抜き出すと、日本の食生活に関する肯定的理由として、食事・栄養のバランスがよい (I、K)、自炊している (M、O) が挙げられた。否定的理由として

は、辛い物があまり辛くない (A、B、C)、自炊が下手、飽きた、手間 (D、M、N、S、T)、中国の食品・調味料がない (A、R) が挙げられた。一方、中国の食事に対しては、肯定的・否定的理由を記した者は各 10 名であった。肯定的理由は、おいしいから (Q、S、T)、家族が作ってくれる・なじみがある (L、M、O)、否定的理由には、安全性・衛生面の懸念 (A、B、C、D、Q、R)、油っぽい (H、I) が挙げられた。

表 2 中国での婚姻状態と食事形態、および日本と中国における食生活の満足度

インフォ マント記号	(1)未・ 既婚	(2)中国在住時の食事の主な形態	(3)現在の 食生活評価	(4)中国在住時 の食生活評価
A	未婚	大学入学前：父の手作り料理、大学：毎日学食	8	7
B	未婚	大学入学前：家の手作り料理、大学：学食と外食半々	7	9
C	未婚	大学入学前：家での手作り料理、大学：学食と外食半々	6	7
D	未婚	学食	7	8
H	未婚	中学からずっと学食	4	7
I	未婚	学食	8	7
K	未婚	自炊、学食	9	7
L	未婚	学校では学食、休みは母の料理や外食	8	8
M	未婚	学校では学食、家では母の料理	7	9
N	未婚	学食	5	7
O	未婚	学食、家の料理	8	9.5
P	未婚	学食か家の料理、外食は殆どなし	9	8
Q	未婚	学食	7	7.5
R	未婚	家での食事、外食は殆どなし	4	8
S	未婚	学食	5	8
T	未婚	自炊、外食	6.5	7
U	既婚	学食	8	9
平均			6.85	7.82
SD			1.58	0.86

考察

今回みてきた在日中国人留学生は、渡日前に中国で暮らしていた時よりも、調査時点における日本での食生活の満足度のほうを有意に低く評定していた。すなわち母国での食並みの満足度は得ていないといえる。その評定の理由には、中国の食事には味になじみがあるが、和食には慣れていないというものや、日本の辛さに対して物足りなさを覚えるという、心理生理的な「慣れ」の問題が挙げられていた。さらに自炊への抵抗感を示すものもみられた。異文化適応の心理的課題と食生活上の問題は連続しており、不可分の関係にある。心理的満足を伴う食生活構築を視野に入れるなら、栄養素の摂取を基準にした日本的食生活モデルの呈示のみでは、食育としては不十分であろう。大学生の食生活の乱れに影響されつつ、文化的な慣れや生活パターンの揺らぎが、彼らの食生活の主観的評価を左右していると考えられる。

今回の結果から考えるなら、バランスの良い自炊が知識・技能的にも環境的にも可能で、ある程度母国風の調理が可能な場合に、彼らの食の満足度が高まる可能性があるだろう。彼らの食育を考えていくには、彼らにとって望ましい食生活とは何か、何を問題と考えるべきか、どのような食生活が可能なのか、食に何を求めているのかなどの検討がさらに必要である。異文化環境下での食材や調理方法の制約といった客観的条件以外に、異文化適応の度合いや異文化受容の意欲といった心理的な適応も食生活と深く関わると考えられる。

我々の先の調査では食の社会的機能が明らかとなり、食の共行動は同朋とのネットワーク強化やホストとの関係作りに活用されていたし、食事の作成と消費は文化交流の手段ともなっていた。こうした食の多機能性は、異文化滞在者の食生活に多要素が関わる複雑な過程を背景としている。文化の狭間にある滞在者の健康行動はどのようにあるべきか、文化受容と心身の適応過程を理解したうえでの支援が求められよう。

引用文献

- 田中共子・高濱愛(2012)「在日留学生における食の文化受容—異文化滞在者の食育という課題への示唆—」2012年度異文化間教育学会第33回大会抄録集、pp.146-147.
- 安友裕子・西尾素子(2008)「留学生の食生活と食環境との関連に関する萌芽的研究—N大学の事例—」『生活学論叢』14、pp.83-95.

謝辞 本研究は、平成23年度山陽放送学術文化財団の助成を受けた(代表 田中共子)。

また、本研究は、岡山大学文学部平成23年度卒業生・渡辺莉加氏の卒業研究の一環として行われた調査の結果を再構成したものです。発表へのご快諾とご協力に感謝いたします。